

2009年6月11日 第21回 やまぐち国際文化学研究会でソウル大学校教授・韓国文化人類学会会長である、チョン・ギョンス先生をお招きして講演いただいた。その内容に関連深い著書の対応ページについてホームページ上に掲載し、多くの方に閲覧いただける形にこのたび翻訳した。

## 「資源人類学からみた排泄物の生態史」

著者 全 京秀(チョン・ギョンス) 翻訳 吉田 久美

1. ウンチのにおい
2. ご飯がウンチとなり、ウンチがご飯となる
3. 蚕室(チャムシル)と盤浦(パンポ)の高層化は生態住宅へ

### 1. ウンチのにおい

奇形児の中にはおしりの穴がない場合があるそうだ。外科手術によって肛門を作ってやらなければその子は死んでしまう。人はウンチは汚いものだと言顔を背けるが、自分のお腹の中にもうんちをいつも蓄えているのという事実を忘れ去ってはならない。グラマーでキュッとしたウエスト、肉感的なヒップが揺れ、すらりとほっそりした脚を見せびらかしている美人も、その肉感的なおしりの内側にはウンチの塊を蓄えている。ウンチが汚いと蔑ろにしてはならない。

ウンチの臭いを汚いと言うが、その臭いが出なければ、人は死んでしまうという事実を知らなければならぬ。ウンチの臭いが出ないようにするには、「汚い」臭いを漂わせる場所を元から封鎖しなければならぬが、そうなれば、すべての人のウンチの穴が塞がれるか、ウンチを作り出す内臓器官を無くさなければならぬという話になってくる。その場合、果たして人は生きられるものだろうか。

実際、ウンチというものは汚いものではなく、一つの物質に過ぎない。その物質が汚いか汚くないか、究極的には人が判断を下す。人がウンチを汚いと考えるのであり、ウンチそれ自体が汚いのではないというわけである。

ウンチを汚いと考える人がトイレに芳香剤を置いて、ウンチの臭いを中和させられると主張するが、これはウンチの臭いはそのままの状態、人の臭いを嗅ぐ機能を混乱させようとする小細工でしかない。嗅覚機能が混乱した人が、「そこにあるはずの」ウンチの臭いを「ない」と考え喜んでいるだけのことである。嗅覚機能の混乱はすなわち人間の渾沌である。

このような渾沌状態はここで終わるのではない。ウンチという物質に対する人間の渾沌が残っている。その物質に対する人間の渾沌のせいで、人間はその物質を誤って処理することとなり、究極的にウンチという物質自体が渾沌状態に陥ってしまった。これは物質の渾沌だと言えるが、人間が渾沌とし、物質が渾沌とした状況を通じて、渾沌とした様子をじっくり伺い見ることができる。現在、私たちが暮らしている日常生活とその周辺は、最も身近に存在するウンチの処理においてさえ渾沌とした状態にある。

人間の状況で起こる日常生活と周辺は常に調和合って一つをなしているのであって、各々が別に独立しているのではない。文化と環境は共進化(co-evolution)しているのである。

これから、私がウンチに関する考えを3つ述べようとする理由は、どのようにすれば私たちの日常生活

と周辺が清潔さを取り戻すことができるか、どのようにすれば私たちの文化と環境が共に正常な軌道に乗ることができるかという答えを探すためである。

釜山の赤崎付近で、朝鮮戦争時代の避難生活真っ只中の頃の話である。ある家に3-4家族が生活を共にしていたので、トイレはこの上なくきちんと組まれたスケジュールに従って、各自が使っていたものだ。年長者が痺れを切らして自分の番が来るのを待つ間に、子供らは主に家の前と道が隔たっている溝で用を足したものだ。水に流されたウンチもあるが、ほとんどは道端に落ちたのだが、だからといって、いつも道がウンチだらけというわけでもなかった。子供が用を足すやいなや、犬の取り分だった。この「えさ」をめぐり互いこうなり声を上げる犬たちの姿も珍しくない日常の風景であった。

その時代には馬や牛、そしてロバが引く荷車に肥桶を載せ、各家庭の汲み取りを行い、同時にお金を受け取ってゆくという、肥え桶荷車を引く職業があった。し尿汲み取りを行う会社の社長にとってウンチという物質はこの上なく大切なものであった。ウンチが自分の稼ぎの源だからである。

知り合いの同僚の方が研究した結果も似たような結論に至った。栄山江を挟んだ木浦市民と田舎の農民はウンチと米を交換していた。ウンチを食べれば、ご飯が出てくるという寸法である。もちろん、その量においては違いがあっただろうが、ウンチ船に米を載せて来た農民は木浦市民へ米を渡し、その御代としてウンチを汲んで行った。

私が他の人よりウンチという単語をよく口にするには、また違った理由がある。私には80歳を超え、今や故人となった父がいたが、父は40代後半から便秘がひどく、便秘治療の第一人者という医者やよく効くという薬を探し歩くほどであった。母がそのことで気をもんだことはおいておくにしても、家を出た後、我が家に電話した時はいつも「おとうさん、便通はいかがですか」と開口一番に尋ねた。兄弟同士での電話でも、いつもそれぞれの便通が決まって尋ねられることであった。

幼いころ、父がトイレに行くと、家族皆が「ウンチが出てくれないと困るんだけどなあ」という思いで緊張したものだ。トイレから出てきた父の顔色で一日の気分が左右されたりした。母はいつも父に「なんとかうまく出すようにきばってみて」と声を掛けたりしたものだ。ウンチをするということはそれ程重要なことなのである。

「快便」という言葉があるではないか。自分の思い通りに用を足せない我が家では、「快便」はとても重要なことであった。便秘薬が新聞やメディアの広告で取り上げられているのを見ると、苦労しているのは我が家だけではないようである。

これほどに重要なことを人々はなおざりに扱う傾向がある。ありふれているからといって、空気や水をぞんざいに扱うように、日常的なことをいい加減に扱うことが人という種の属性であるようだ。ご飯を食べることやウンチをすることが全部日常的なことなのに、人はご飯を食べることには随分ご執心で、食事で見栄を張ろうと努力する。

人の体の中で上にある穴ですることは食べ物を体の中に入れることであり、下にある穴ですることは体の外へ出すことである。この二つの穴は事実上一つの長い管でつながっているが、人を生かすために必要なエネルギーの生産のために食べる食べ物が、体の中を通り抜ける入口と出口であるという一体感を感じるべきである。しかるに、この二つの穴は同程度に重要な役割を果たしていると考えられる。

もちろん、口という穴は、食べる以外にも、言葉話すのに使われ、何かをなめるためにも使われるが、

下の穴はひとえにウンチを出すことのみを担当しているという違いがあるにはある。韓国語で口を「口の穴」「言葉の穴」などと言わないのは、その機能が多岐にわたるからであり、ウンチをするところを「ウンチの穴」と言うのは、その機能が唯一のものだからのようである。

多くの場合、同僚や友人、または恋人同士で「ご飯を食べに行こう」と誘われ、一緒に仲良くご飯を食べたりする。しかし、南太平洋のトロブリアンド(Trobriand)諸島では、ご飯を食べることがセックスをするよりも、より私的領域に属する内密なことである。私たちが行う行為というものは、{それほど相対的なものである。

しかし、口とは別の穴で起こることについては、一緒にしようと言うことはない。「ご飯食べた？」と挨拶代わりに聞か、「ウンチした？」という挨拶はありえない。人にとっては、上の口でご飯を食べることは公的にできることだが、ウンチをするのは完全に私的な領域に属するようである。だからそのことを面と向かって取り立てていうことがタブー視されているようである。

ウンチ、又はウンチの穴に関する事柄がタブー視されていることまでは良しとしても、それらを等閑に扱うのは間違っている。公的領域は重要で、私的領域は大したことではないという認識構図が出来上がっている韓国文化の一面を垣間見ることができる場面でもある。タブー視されているものの中には、大切に扱われているものもあるが、等閑に扱われているものもあり、大切に扱われているものに対しては、すでに人々がそれに意味を付与しているので、別段問題にならないが、等閑に扱われるタブーが他でもない日常生活で生じる病理的な問題の要諦であると考えられる。

少し前に城南の牡丹市場に行き、雑種を一匹買い求めてきた。犬肉料理については私なりに一家言を持っていると自負しているが、土佐犬や雑種の犬の中から純血種の雑種を探すのは容易いことではない。雑種の体に本当にまずい土佐犬の血が流れている状況だからである。

私と目が合った雑種一匹がその夜から次の日にかけて食卓へ上った。毎朝、かわることなく済ませる「用を足す」という行為が、その日だけはとても爽快であった。ウンチの量が多いだけでなく、スルリと出た。こんな時には、いつも私はウンチがもったいないと切実に思う。そのもったいない物質が水洗トイレの便器の形のせいで、そのまま吸い込まれてしまう。もったいないからといって私が自分でどうにか別の方法で処理することもできない。

これは個人の問題ではなく、構造的な問題である。水洗の洋式トイレも問題だが、現在のように建てられた集団住居施設であるマンション構造が抱える問題である。人はこのような問題について、一度たりとも深刻に考えてみることなく、頑として住居様式を変えてしまった。眠り、食事し、見栄を張ることだけが大事にされ、ウンチをすることについては全く考えてみなかった結果として今日の混乱した構造的な問題に至ったわけである。

水を流しさえすれば、目の前から消えてしまうウンチは、厳密に言えばただ流されるのではなく、相当な量の水とエネルギーを消費しているのである。一人が一日に平均1リットル程度のウンチをするのが正常だと言われているから、我が家の4人家族が一日にするウンチの合計は2升半は軽く超えるであろう。この程度なら、犬二匹、またはブター匹の朝ごはんとして十分ではなからうか。

私が住んでいたマンションの一つの建物には約150世帯が住んでいた。毎朝、この一つの建物から出るウンチの量を考えると、約150頭のブタに一食食べさせられる飼料がそのままゴミとなり捨て

られ、それがそのまま漢江汚染の主犯となっている。それゆえ、夕食にたんと食べて次の日、大量のウンチが出る時には、より一層ウンチがもったいないとの思いに駆られる上に、やりきれなさまで感じてしまう。

そのもったいないものをお金をかけて汲み取り、自分が払った巨額の税金までつぎ込み処理するのが何ともやるせない。誰かの腹を満たしうるものを捨てるのだからわたしも納得ができないのである。腹をすかしたやつらのお腹を満腹にしてやるのに使うのなら、一転して、びた一文お金をかけることなく感謝までされるというのに……。

用を足すことが重要な人には、出すべき対象であるウンチも大切に扱うべき相手である。そのため、ウンチは汚いものとしてのみ扱われてはならない。ウンチが汚いという考えは輸入されたものに違いない。営農方式とブタの飼育方法が異なる西洋人がこの地に入ってきて以来、ウンチを汚いものとみなし、頑なに西洋式を追い求めてきた私たちの暮らし方が、ついには無公害の飼料と自然産の肥料であるウンチを自ら汚いものと考え始めたのである。

私たちの生活と考え自体が帝国主義の影響を受けているという問題意識がなければならない。西洋人、または西洋の生活スタイルに慣れ親しんだ韓国の知識人の前で、私がウンチは貴重なものだと主張したなら、私は陰口を叩かれるだろう。実は、韓国の知識人たちも、ウンチは貴重なものだと考えてはいるものの、西洋式にかぶれた考え方のせいで、自らの考えまでも投げ出すきらいがあるのが、今日私たちの生活がバラバラになってしまった一因である。

生活がバラバラになったことに留まらず、その生活を取り巻いている周辺環境までもすっかり散逸してしていることを私たちは今やっと感知している。このような過程が色々なところで繰り返されれば、私は自分を失うことになる。すでに私たちはそのような歴史的な経験をしている。

ウンチという物質はご飯を作るのであり、ウンチはきちんと扱われるべき大切な物質であり、そしてウンチという物質はゴミという名前で捨てることができない貴重な物質であるという個人的な考えをぶちまけた。私の話は実際のところ、至極当然であり、そしてこの上なく日常的な事実の繰り返しなのである。

あまりにも当然のことがなされていないという点自体が大きな問題点である。あまりにも当たり前のことは、当然私たちの生活の基本をなすべきものであるが、そのようなあまりにも当然のものがきちんと成されていないのは私たちの生活の基礎が誤っているということである。また私たちはこのあまりにも当然のことが成されていないがために起きる途方もないことを感知できていないという点についてより驚愕せざるを得ない。

ウンチという物質に対する私たちの認知過程で働いている「汚い」、「恥ずかしい」、「ゴミ」等等の象徴作用があるために、その物質自体の重要性を見過ぐす傾向があるようである。考えがそのような方向へ向いてしまうと、ことは難しくなるということを私たちはよく知っている。考えがそちらの方へ向いてしまった構図の中では、どれ程環境がどうで公害がどうだと訴えてみても、このような叫びは究極的には生とは交じり合わない言葉となってしまうのである。

毎朝、150世帯から出るウンチをアパートの地下構造物に溜めて発酵させたら、我が家の周辺は相当量の天然ガスを減らすことができるだろう。ウンチの発酵過程で発生するメタンガスは、オゾン層破壊の役割をしたりするのも事実だ。だからこそ、それをそのまま大気の中に排出せず、きちんと溜めて使え

ばエネルギーも得ることができ、オゾン層も保存され、一石二鳥ではないだろうか。それだけではない。

ウンチを漢江にそのまま垂れ流すことにより発生する水質汚染も減らすことができ、そのウンチを処理するのにかかる数十億ウオンの税金を使う糞尿処理場を建設しなくてもいいのである。一石二鳥でなく一石四鳥であるというわけだ。何も考えず、このようにいいことをしていないのである。今になって、既存の制度の中で利権を享受している既得権層がいるので、このような運動に対して強力な抵抗をするであらう。

私たちの生というものは、それほどすごいものだろうか。とても近く、至極つまらないものから生の意味を見出す作業に訓練されていない人々が、どれ程大きなことを成し遂げようか。自分の体の中に溜め込んでいるウンチから考えてみてください。そのウンチのにおいを嗅ごうと努力し、ウンチのにおいを記憶しよう。

## 2. ご飯がウンチとなり、ウンチがご飯となる

人だけが食べて生きているのではない。生態系を構成する微生物や植物、そして動物が皆、各々の糧を得て生きている。食べて生きているのはエネルギーの流れであり物質循環の過程であり、生物界を支える普遍的な現象である。この流れが究極的に生態系を維持させる最も重要な過程であるという点を考えれば、ご飯としてみなされたものがウンチに変わる過程、つまり、ご飯とウンチの連結状況とそれに関連した物質循環の過程に対し、詳しく観察する必要性を感じる。ご飯とウンチを別のもと考えては、私たちの生はきちんとした理解が得られない。

人のみを中心としてご飯を考え、人の中でも最近最も「優れた」西洋人を中心に考え、「パン」を取り上げる。つまり、私たちの主食は米だが、西洋人の主食は小麦である。

「米」についてももう少し細かく見ておくと、インドネシア人は「サンバル」と呼ばれるご飯を食べる。カタクチワシで作られたスープのようなもので辛く作ったたれをご飯に混ぜて食べる。インド人がカレーと呼ばれるものを食べるのととても似ている。南アジアから東南アジアにかけての地域で主に食べるのは混ぜご飯というわけである。

アマゾンのTUPIKAWAHIBインディアン族は焼畑によって掘り起こした丘陵の頂上でマンディオカ(キャッサバ芋)を栽培する。英語で「マニオク(キャッサバ)」と呼ばれるこの球根類は毒性があるものとそうではないものがあるが、食べるための処理過程は相当複雑である。同一の種類をベトナム人は「サン」と呼び、ニウエ島を含む南太平洋の人々は「タピオカ」と呼ぶ。韓国で言えば差し当たり山芋の一種といったところだ。

こういった類の球根類を世界食料機構では、もともと食料としてみなしていない。いわゆる野蛮人たちが食べそうなものを「人間様」の食料分類に入れるなどとんでもないという象徴的な意志が含まれているのである。食べることも西洋人中心に決められているのが、現在私たちが暮らしているこの世の中の位階秩序である。人が何を食べるのかについて干渉する無言の蔑みなのである。食べることで有言の呪いをかける場合もある。

私は犬が何しろ好きなので、犬を「食べる」。犬をペットとして飼っている人々は老いた犬が死ぬとすり

下ろしてゴミとして捨ててしまう。それは他人の目に触れないように隠しておいて、自分は犬を愛していると豪語する。「動物愛好家」を名乗りそれらしい装いをする。腹立たしく吐き気がする。タンパク質のリサイクルという次元からも言語道断というわけだ。

食べることで争うのも見苦しくみっともないが、食べることをとやかく言うのは反人間的で反文化的である。人が何を食べようが干渉することではない。犬をペットとして飼うという人は犬を食べる人を軽蔑し蔑む。世の中はこのように食を巡り、不平等と蔑視で満ちた面を見せたりもする。

食は究極的に文化の問題であり、その論議は普遍的な属性を帯びている「食べる」対象としての普遍的属性の裏側には階級特殊的な、又は地域特殊的な文化特殊性の問題が内在していたりする。3食とも肉だけを主食として食べるからといって、皆が豊かに暮らしているわけではない。イヌイト(Inuit)族は元々食事という概念がない。いつでもお腹が減れば肉を食べる。常に肉を食べる行為と関連してエスキモー(「生肉を食べる人」という蔑称)という蔑称があるのを前提にすれば、肉をたくさん食べる人が必ずしも豊かに暮らしているわけではないようである。

しかしながら、お偉い方が食べるものと、狭くて汚い街の虫けらのような人生を送る人が食べる食事が同じ水準であるわけがない。食事には厳然たる階級的な性格を内包する生活スタイルが隠れているものだ。それゆえ食事は人類と生物種の普遍的な現象であるが、同時に階級秩序の特殊な状況を示す不平等の象徴でもある。

現代韓国社会の文化的な現象において、食事に関連した不平等性がより深刻に表れる側面も指摘することができる。「おまえは私の餌だ」という表現があるが、これは自分が猫で、相手が鼠という話であり、「おまえは私に半殺しにされる」という意味である。最も蔑む対象をご飯に比喻することが韓国文化の中の言語慣行として表れている。最も必要なご飯を一番軽んじる対象に比喻する韓国人の心根を指摘することができる。ご飯がひどく階級象徴に染まっているという考えを深めた。

しかしながら、誰が何を食べたのかに関係なく、皆がウンチをする。ウンチをするという現象もご飯を食べるのと同じ位、生物学的に普遍的な現象である。ご飯は階級的に不平等な現象を呈するが、少なくともウンチをするにおいては、階級が関係することはない。食べたものが内臓器官を通して栄養分を摂取した後に排泄するのがウンチであり、白い白米を食べようが、赤い肉を食べようが関係なく、お腹一杯食べれば黄金色で太いウンチが出るものである。しかしいくら良いものを食べても、食あたりを起せばウンチの「顔かたち」も変わるというものだ。

ウンチは外部に関連した問題ではなく、自分の身のこなしをどのようにしているかという内面の問題である。自分の体と心の管理がどれほどきちんとしてきているかを判定する最も確実な物差しがウンチではなからうか。食は金と権力に関係することであるが、ウンチは身の修め方(修身)に関係している。それゆえ、食が不平等の問題に、そしてウンチが平等の問題に焦点を当てていると主張するのは論理の飛躍だろうか。

人はご飯について話すのが好きだ。友達に「ご飯を食べに行こう」と誘う。「ご飯食べた?」と尋ねる。食べていなくても食べたと言い、食べたふりをするのが虚勢を張るには必要なことである。これは、すべてご飯を食べることが権力関係と支配の問題であるために表れる文化的反応のようである。しかし、内臓を通ったご飯がウンチに変わる頃には、皆が同じ立場に立たされることになる。ある人はしゃがんでおし

りのふたつの割れ目を完璧にさらけ出してウンチをして、ある人はイスのような所に中途半端に腰掛けてウンチをする。

ベトナムのメコン川に住む住民は自分がしたウンチを魚に食べさせるが、その昔、漢の都の都市の人はブタに食べさせた。糞尿の生物学的処理方法の元祖というわけだ。最近の生物学的な処理方法と過去のそれとの違いと言えば、単に糞尿の分解のために用いられる生物が目に見えるものか、そうでないかの違いだけである。

その昔、人のウンチは魚やブタのえさであった。漢の国の人口が約五千万人だったという記録が残っている。五千万人がしたウンチはそのすべてがブタの食料として調達され、その流れから、中国料理の代名詞がブタになったという歴史がある。

人と内臓構造が最も酷似したブタもウンチをする。ブタのウンチは田んぼと畑で育つ農作物に欠かすことのできない栄養分としてリサイクルされた。このように循環するリサイクルの輪によりゴミが発生することはなかった。すべてのものは次の段階の命を育むための資源として利用される生態系の流れの中で、ご飯がウンチとなり、ウンチがご飯となるということが如実に証明されている。

中途半端な西洋式を受け入れた今日、私たちは私たちがしたウンチを科学的という名前の方法を用いて私たち自ら食べているという事実に比べれば、魚やブタを用いてウンチを分解する方法が、遥かにより理想的だと切実に思う。生態系の循環過程に対する無知と結びついた悪質な官僚主義と人倫にもとる商業主義の合作としてもたらされた今世紀最大の傑作が八堂上水源であり、漢江水であり、洛東(落糞)江<sup>ナフトン</sup>である。

昔、鳳伊金先達はきれいな水売りものにしたが、政府と科学を前面に押し出した最近の水関連の商売人はウンチ水を売る。皆のウンチが一緒くたに合わさったウンチ水を、私たちはみんなで飲もうとしている。それゆえ三千里の錦繡江山(=朝鮮半島)をウンチ水共同体に作り上げようとしている。最も重要な問題への言及を忌み嫌い、ずっと蓋をしてきた結果が一つのウンチ水による飲み水である。

半月ご飯を抜いたからといって命に支障をきたすことはない。しかし半月の間、ウンチができなかったら、問題は深刻である。ウンチが汚いのは「汚い」と考えるから汚いのであって、本来、ウンチは汚いものではなく、ただ単に物質に過ぎない。有機物が多く含まれた物質である。有機物がどっさり含まれているので、ウンチは水の中で分解されない。ウンチを分解することができるのは土の中の微生物である。

したがって、ウンチが水と混ざれば相剋であるが、ウンチが土と混ざれば相生の現象であるというわけだ。これはウンチの五行の運行であり、私のウンチ哲学である。ブタや魚が人のウンチをえさとして食べるのは一種の分解過程というわけだ。そのようにしてすくすくと育ったブタと魚は人間に高蛋白を与えてくれる。ウンチとご飯はこのようにして循環図式を作っていく。

ご飯とウンチはこのように本来一つの共同体的な枠組みの中で繋がった物質である。人が頭の中で描いた誤った認識により、ご飯とウンチの間を隔てることで、第一の悲劇が始まるというわけである。これは認識論の大乱である。

汚いものと認識されたウンチが科学という名の下に、そして西洋式の文明という名の下に水と混ざる方式で処理されるのが第二の悲劇というわけだ。生物物理学上、ウンチは水と混ざってはならないとい

<sup>1</sup> 韓国語で「東」と「ウンチ(糞)」の発音は類似している。

う常識を忘却した科学技術と文明が惹き起こした生態的惨劇というわけだ。

自分のウンチと人のウンチを皆混ぜて土へ戻せば、私たちはウンチ共同体を回復することができる。土の中にいる微生物が混ざった私たちのウンチをえさとして食べ、作られたメタンガスはご飯を炊く燃料として利用できるのはもちろんのこと、発電所のタービンを回すことができる威力を持っている。残った残滓は土壌を肥沃にするので農作物のための良質な堆肥として利用される。

ご飯を食べる時、口の中に入るご飯だけを考えた結果、私たちの生活はこの有様に落ちぶれた。ご飯を食べるときに口の中に入るご飯がその次の段階でどのような過程を経て、ウンチの形となり体の外へ出て行くまでの段階を順々に繋げて考えれば、これ以上の生態系の乱れは食い止めることができる。

唇とウンチの穴の触り心地は同じである。ご飯が入るところとウンチの出るところがこれほど似通っているのは、もともと、ご飯とウンチが相通ずるといふ生物学的な表現であると考えられる。始まりの時点において結果を考えること、つまりご飯とウンチをひとまとめに考え、ウンチ共同体を回復する道だけが未来の生活を保障することができる唯一の模型方案である。これは認識の問題であって、技術や科学の問題ではない。日々ご飯を食べウンチを作り出す私たち個人々の考えがよせ集まった認識や思想に左右される問題に過ぎない。

ウンチを汚いと考え、避けて通った結果がこの世の中をこの有様にしてしまった。ウンチをするにあたっては、万人が平等である。人に最もよいことは原始的なものから見出すことができる。いつからか私たちは「ウンチを垂れる」という表現が「ウンチをする」というものにとって代わった生を生きている。「垂れる」という品のない表現がウンチにくっついている限り、私たちの生がきちんと営まれているとは言えない。最も原始的で平等な生の方式について、低俗だと考える限り、私たちは自らの生から裏切られるしかない。

「ウンチした？」、または「ウンチしに行こう」という会話が昼休みに同僚の間で成り立たなかったとしても、せめてウンチをご飯以上に尊重できる風土を期待してやまない。

### 3. 蚕室(チャムシル)と盤浦(バンポ)の高層化は生態住宅へ

大清湖と八堂湖の水面に緑色の絨毯を敷いたようだ。飲むべき澄んだ水は緑色に変わっている。朝鮮半島南部の海岸には、赤色の絨毯を敷いたようだ。南部の海岸で始まった赤潮現象で魚介類が生きるべき海に死の影が垂れ込めている。三千里の錦繡(=朝鮮半島)の美しさをより増すために、緑色と赤色が必要なようである。湖の緑色と海の赤色はすべてプランクトンが増殖して表れた富栄養化現象である。これは湖や海の水に必要な有機物が大量に流入するために起こる現象である。その有機物はもとをただせば捨てられたウンチとおしっこである。

健康な4千万人の人々が一日にするウンチの総量を想像してみてください。その中で、約30%がきちんとした処理過程を経るだけで、残りはすべて放流されている。処理する過程では施設費と運営費が使われ、それでも飽き足らず、人体に害の有る化学物質を使ってウンチを分解する。どのみち今の方法では私たちがしたウンチが回り回って私たちの口へもう一度戻って来ているのである。

聖書のマタイの福音書15章16節から18節にかけて、ウンチに関する話が出てくる。「口に入るものは



腹を通して外に出される」過程に関する説明である。外に出されたものがどうなるのかに関する質問をしなければならぬ深刻な状況が私たちに起こっている。朝、私がしたウンチが今どのような運命を辿るのか考えてみなければならない。

渭川公団というものの存在に係る可能性を巡り、大邱と釜山はお互いに押さえ込もうと試みたことがある。大邱の経済のためにはそれが必要なようだが、それを設置することになれば、釜山の人々は洛東江に飲む水がなくなると必死である。産業排水がいくらきちんと処理されたとしても、現在のような工業経営の構造の中で作られた渭川公団は洛東江を「落糞江」へ変化させるであろうことは目に見えている。

個人の生もゴミの量産体制であり、モノを作る工場もゴミの量産体制で構成されているのか、現在の私たちの生の方式である。なぜそのようになったのだろうか。消費のせいである。それゆえ、私は身の毛がよだつほど消費という単語が嫌いである。その単語の意味の中に利用やリサイクルという内容が入り込む余地はない。「使ってやろう」という消費の概念を持っている消費者が量産されているからである。そのような消費概念のために、私たちは自分で自分の首を絞める道へ追い込んでいく。誤った消費概念の基礎の上にウンチとゴミを量産する体制によって、人々はお互いに殺し合おうとしている。

環境が誤った方向へ行きつつあることを認識し始めれば、それを認識した人がまず誤りを犯したのであって、環境がまず誤りを犯したわけではない。環境は実際のところあまり関係がない。また、人々が死に行くのは、環境に問題があるからなのだと思って認識している。自分が死に行く原因が自分の過ちではなく、環境が過ちを犯した結果だと考えているのである。環境はなぜめちゃくちゃになってしまったのか。

実際、環境は大きく過ちを犯したことはない。環境が大きく過ちを犯す前に、人という種からいなくなるのが順序であるので、今、私たちは環境を心配している場合ではない。ウンチを捨て、ゴミを量産する人間自らが作り出すこのような問題のせいで環境が汚される。

元来、人に危険なものは「自毒」であった。すべての生物体においても同じである。ガンというのも一種の自毒現象である。自らの細胞の中で異常なものが発生して起こる現象である。体の中で生産されるウンチと生活の中で出されるゴミが私たちの生活に自毒を発生させる原因である。自然状態ではリサイクルされる物質であるウンチとゴミが、生活の中ではガンのような自毒へ変わっている。私たちの生活のせいである。

ウンチという物質は比重が1を少し超える。水質検査時、普通3等級のBOD(生物化学的酸素要求量:水の汚染度を示す)が3.5ppmであるが、家庭からの下水は200-300ppm、有機物成分が多い焼酎(25度)は30万ppm、ウンチとおしっこが混ざったものは2-3万ppmに達する。ウンチには有機物成分がそれほど多いという話であり、この有機物によって、水質汚染の主犯がウンチとおしっこだと言っている。

昔の言葉に、「ウンチを捨てたものを百叩きに処す」という言葉があり、ウンチをむやみに捨てる者には重い刑罰が課せられたという話がある。汚い物質を捨てたために制裁を加えるという意味ではなく、重要な物質をむやみに扱ったので刑罰を加えるという話である。土の三大肥料が窒素とリン、そしてカリウムであり、ウンチに大量に含まれる窒素とリンを農業用肥料として使う戦略のようである。

八堂湖付近の農民が人糞を畑に撒いたからと逮捕され、刑を受けたことがある。農夫はウンチが農業用の肥料として大切なものであると考え、肥桶で腐らせた後、肥料として畑に撒いたのである。その地域

は上水源保護区域に設定されていたために、上水源保護法に抵触して畑に肥料を撒いた罪で逮捕された。つまり、ウンチを捨てた人に対して鞭を打つのと類似した現象が起こったわけだが、この場合のウンチに対してあてはまるのは「もったいない物質」ではなく、「汚い物質」である。

ウンチを重要なものと考えた文化が、ウンチを汚い物質と考える文化へ文化変動現象が起こっているのである。ウンチがきちんと腐れば畑にとって肥料となり、よく腐ったウンチは土での分解が簡単に起こる。厳密に言えば、ウンチを土に混ぜれば問題がないが、ウンチを水に混ぜれば問題が発生する。

先ほども述べたように、ウンチは有機物が多い嫌気性物質であるため、水の中では分解がうまく起こらないが、土の中の微生物によって分解作用が進む。分解作用のおかげでウンチの中の有機物によって好ましい窒素とリンを提供することによりウンチは農業用肥料の役割を果たすのである。

農薬と化学肥料の投入で使い物にならなくなった土を生き返らせるために、土にウンチを撒く農民の知恵が褒められるべきだが、農薬と化学肥料を畑に撒いた農民はよくて、ウンチを撒く農民だけが逮捕された。生態系の物質循環の原理から見れば、表彰されるべき農民が刑を受けたのは納得しがたいというわけだ。私たちに起こった農業を行う法と関連した技術変化の方向が誤っているのであり、文化変動が人を苦しめる方向へ進んでいることがわかる。

新しく導入された技術について、よくよく考えてみる必要がある。新しいからといって、みな良いものとは限らない。短期的には、それなりに良さそうに見えるものでも、長い目で見ると害になる場合もあるものである。導入された技術は既存の文化に合致するものでなければならない。そのような技術を私たちは適正技術 (appropriate technology) と呼んでいる。

大切な物資であるウンチを撒いたからといって刑を受けたために、すでに人々の観念にも混乱をきたしている。ウンチとは悪いものなんだと考えさせる司法組織の決定が私たちの頭を混乱させる。

技術上で起こった文化変動は組織と観念をすべて揺るがすものである。従って一つの技術が既存の文化に合致するかどうか検討することは重要である。伝統文化を守るという点からだけではなく、その伝統文化が背景としている生態系を保全するという意味においても重要である。生態系の属性は地域特殊であり、文化とは、生態系に適応した現象だからである。

ウンチにも五行がある。ウンチが土と混ぜれば相上であるが、水と混ぜれば相克となる。科学もこれを証明している。有機物が多いため、水では分解作用が起こらないばかりか、その有機物が究極的には水の酸素を破壊してしまう。それゆえ、最近起こっている水質汚染の主犯はウンチと言えるわけだが、そうならば、ウンチが悪い物質という烙印を押されてしまう。

元来、物質や技術は、良し悪しを決められるものではない。それらが、何らかの意思を持って人々を苦しめるのではない。人々がそのような物質と技術を悪い方向に追いやった結果、うわべしか見ない人はウンチを「悪い物質」とみなすことになる。土に返ったウンチは良い物質だが、水と混ぜたウンチは飲めない水を作る主犯に転落する。ウンチ哲学の五行現象であり、ウンチ科学の自然現象である。

毎朝、水洗式便器に座って私たち皆がしなければならない苦悩がある。この便器が果たして私たちの環境にふさわしいのであろうか。においがするからと水を流せばそれでおしまいたが、水を流してしまえば流れ出る水と一緒に混ぜたウンチの運命は水で流した人によって「悪いウンチ」と定められる。

捨てられるべき悪いウンチはただ捨てられるのではなく、相当量の水を伴う。1度に13リットルの水がた

だウンチと一緒に捨てられるのだが、時には一度では流しきれず、しばらくタンクに水が溜まるのを待つて再度水を流す。東アフリカに住んでいるマサイ族の1家族が一日に飲む水の量が、ウンチをすると、ゴミとなりウンチと一緒に流れる。ウンチと水、二つの資源が混ざった瞬間にゴミと化してしまう水洗式の洋式トイレこそが環境と資源を考える人々が排斥すべき技術である。それは私たちの生活にふさわしい技術の種ではない。五行と科学の理知から外れる技術である。

だからといって、私一人が洋式トイレを使わず、毎朝、別途ウンチを処理する方法もない。新聞紙を引いてしゃがんでしたウンチを処理する適当な所がない。ゴミ箱に捨てるしかないわけだが、リサイクル可能なように分類されていないため、結局捨てるしかないのである。そうするためには、分別収集用ビニールにウンチを入れ、11階から階下まで持って降りなければならない。エレベーターに乗り合わせた隣人の訝し気な表情を考えれば、一層空恐ろしくなる。

一つのアパートに住む住民全体がこの問題の深刻さを認識し、私が行おうとする方法に同意して、水質汚染を根本から防止するためには、ウンチを水と混ぜないようにするために分別収集用ビニールに入れ、皆がエレベーターに乗って持ち運ぶと仮定してみよう。格好はともかくとして、その費用はどうなるだろうか。結局、私一人では、または社会の一角だけではどうすることもできない構造的な問題に直面する。環境部長官が先頭に立つべきであり、大統領が苦悩すべきウンチ処理の政策的な問題である。環境と未来が保証される生の質がかかった大きな問題である。

近頃、私たちになじみのある話の糸口は、「環境的に見て健全で持続可能な発展(ESSD: Environmentally Sound and Sustainable Development)」である。これを「持続可能な発展」と翻訳するのは無知の極みであるばかりか、大衆を欺くことでもある。これならば環境問題が解決されうると皆が信じたがっている。技術が生にふさわしいか否かを問いたすべきものであるように、組織や観念といったものも、同一の方法で問いたさなければならない。

ESSDは一種の観念として浮上した。この観念が私たちの身の丈に合うために問いたすべき問題はないだろうか。一見すると極めて望ましいように見える。環境の健全な現象を嫌う人がどこにいるだろうか。

いまやさらに進んで、持続可能な発展という言葉が一人歩きしている。経済発展をどのように持続させるかという方向へ元来の意味を変質させる傾向も侮れない。長期間にわたり人が徐々に死に行くことには我関せずであり、短期間にいかなる犠牲を払ってでも経済を立て直そうという論理が幅を効かせている。

輸入されたESSDは韓国式SDへ意味が変質し、持続的に経済優先論理を裏付けしている。まるでその昔輸入された民主主義が韓国式民主主義へ化ける詭弁の論理を作り出し、人を苦しめたようにである。

ヨーロッパ人が考えるESSDは私たちの生、または第3世界の生の中で検証されるべき部分がある。そのESSDという観念が適用される問題にふさわしいかどうか検証されなければならない。輸入される文化を受け入れるにあたり、問題がないかどうかである。

ESSDという言葉は耳に優しい。すでに下水施設がきちんと備わっており、公害産業は全部が第三世界や開発途上国に展開した状態でのESSDと経済発展の数値に縛られ、公害産業の輸入も甘んじて受け入れ総力邁進する人々にとってのESSDでは本質的な違いが存在する。後者の状況においてESSDを

強要すれば、環境帝国主義の版図が広がるのは自明である。

歴史的に見ると、この世の生の相当部分はずでにヨーロッパ人によって受けた苦痛の痕跡が随所にくっきりと残っているが、そういった部分に対する考慮と代案なくして環境帝国主義が強要されれば、苦痛を受けた人々が再び苦痛を受けることになる。ウンチを処理する洋式トイレはそのような過程をまざまざと見せつけている。西洋式ということで受け入れた人々が自分の糞尿下水処理に関する文化は考えず、西洋式のスマートな便器だけを受け入れることにより、問題の種は生まれた。西洋式トイレを使えば、ヨーロッパ人のように文明人になれるだろうという期待がこもった神話が植えつけられたのである。

輸入元から発生した問題がいまや輸入した側の生活の内面に入り込み土着化してしまっている。ウンチを処理する組織がきちんと備わっていない状態でそれを処理する技術もきちんと備わっていない状態で、人々の観念だけが変わってしまった状況の矛盾の中で韓国の環境問題は土着化しつつある。

西ヨーロッパの人々が考案したESSDは文化という検証過程を経て、ESCASD(Environmentally Sound & Culturally Acceptable Sustainable Development)へ転換されることを私は大胆にも要求する。ESSDというものが文化的に受容可能なものかどうかという検証過程が必要だということだ。

この転換過程は究極的には私たちの問題であり、他者の問題ではない。絶えず何かを受け入れている第三世界の問題である。西ヨーロッパ人もこの過程で何かをしなければならぬと考える時が来るだろう。なぜなら、そのようにしないことにより発生する問題の大きなサイクルはいつしかヨーロッパの方へブーメランとなって返ってくるからである。

私がESSDを拒否し、ESCASDを提案するもう一つの理由は生の本質を考えるからである。人が生きている生の形式である文化は、本質的に環境と共に進化する。人が与えられた環境に適応して生きていくからである。誕生可能な環境帝国主義と文化と環境の共存的進化論理により、ESCASDを支持しなければならぬと考えている。これは私の理論である。

ESSDの構図で進められるウンチの処理方法は西洋式のトイレを遵守するほかないのである。それは本質的にウンチの科学とウンチの哲学のためにする方法である。ウンチを重要だと考える韓国農民やインド農民の観念が受け入れられるESCASD構図におけるウンチの処理方法はウンチを水と混ぜないというものである。それが環境的にも最も健全なウンチの処理方法であり、文化的にも受け入れ可能である。

現在の生の方法を基本骨格と見れば、農業は不滅であり、環境に優しい農業のためには化学営農に代わる方法が考案されなければならないだろう。現在の有機農業が持つ規模の経済問題が解決される環境に優しい営農をウンチの処理方法と有機的に連結させる方法を考えることでウンチによる水質汚染を元から絶つことができる。

蚕室と盤浦の低層アパート群を高層化するという計画に私は大賛成である。韓国の大都市の土地面積を考えれば、低層アパートを高層化するのが望ましい。但し、一つ条件がある。

高層化が環境にやさしくなければならぬわけだが、現在の共同住宅が持つ糞尿処理方法を維持すれば、高層化は環境に優しいものではなく、その流れに逆行する。もっと多くの人々が一箇所に集まり、より大きな汚染源を生産する構図ができてしまうからである。汚染源は規模が小さければ分解がうまく進むものである。現在の糞尿処理方法で高層化してしまえば、汚染源は大きくなるほかない。従ってウ

ンチの処理方法を水でする方式から土で処理する私たちの伝統的な観念へ高層化時代の糞尿処理方法を再創造するのである。その条件さえ満たされれば、高層化によって集められるウンチの量はより増え、それを活用する側の利益はさらに大きくなるだろう。

水を使用しない方式(例えば、クリーブス<sup>2</sup>のメルトロムのようなもの)を導入し、共同住宅の地下に自分たちが出したウンチを一箇所に貯蔵する施設を設置する。ウンチという物質は一定期間過ぎれば発酵するので、微生物を使い発酵を助ける方式を取れば、天然ガスであるメタンが発生する。これを各家庭に還元してやる。発酵が進んだウンチは一まとめにして、有機営農団地へ送る。

私がしたウンチが誰かのウンチと一つになり無公害の天然ガスも生み出し、土壌を肥やす農法である有機農業も振興し、大気中のメタンを減らすことでオゾン層も保護し、皆のウンチが一緒くたになるので共同体意識も戻り、一体一石何鳥となろうか。

団地の中で臭ったらどうするのかだって？自分のウンチのにおいを嗅ぎたくなければ死ぬしかない。韓国の格言に、「自分のウンチの臭いを三年嗅がなければ死ぬ」というものがある。ウンチのにおいを嗅ぎたくなければ、いっそのことウンチの穴を手術して縫合するなり、それが嫌ならウンチ水を飲んで生きていくかである。(それって生きていると言えるのか?)。ウンチのせいで死ぬなら、どうやって死のうが変わりばえしないのではなからうか。本当に決着をつける段階に来ている。

蚕室と盤浦に環境に優しい高層アパートを建てるそうなので、ぜひとも生態住宅という概念を導入しなさい。団地の中にバイオパワープラントを建設するのである。そうすることで未来が保証される。未来が保証された生態アパートは坪当たりの価格もより高くなるだろう。私たちのアイデアで世界的な未来型環境に優しいアパートを建ててみよう。そのノウハウは未来型環境産業の基礎となるだろう。それがESC ASDを実践する方法である。

\*\*\*\*\*

## 12. ウンチの海の未来黄海

海を埋め立て、土地を広げることで農業生産力の増大と工場の敷地確保、さらには国土拡張という名分が付与された干拓事業が国家基幹産業として見なされ、未来型社会間接資本(Social Overhead Capital)として定着している現実を嘆いている。

一寸先を見通すことができない愚かな者どもが土地投機開発方式による金儲けに目がくらみ、未来を壊そうと試みる行為が黄海沿岸の大規模な干拓事業である。ここに技術楽観論を全面に押し出した科学技術者が付和雷同している。湿地生物が全て生き埋めとなり、湿地を飛来地として渡ってくる渡り鳥をみな追い出してしまい、海洋資源が頼みにする高台までも無くしてしまう最悪の環境破壊行為が、政府主導で進む干拓事業である。環境破壊の最大の事例を政府が先頭に立っているのだから、環境破壊を幫助する環境省の破壊を試みなければならないようである。

イスラエルの死海を名所と見なす観光客は水に浮いて本を読むという楽しさがあるだろうが、そこに住む人々には死海から吹く塩風のせいで生じる苦痛がある。もともと湖だったところが、文明建設のために行われてきた数千年にわたる農耕地拡大により、淡水の流入が減って、蒸発量が多くなり、海より塩分

---

<sup>2</sup> スウェーデンのメーカー名

が高い湖に変わってしまった。文明過程が環境破壊を招いた事例である。

他に死海化しつつある塩湖としてアラル海がある。天山山脈を水源とし、ウズベキスタンとカザフスタンにまたがるシルダリヤ川とアムダリヤ川の水が周辺の農耕地の灌漑事業により遮られ、生活廃水と工場排水だけがアラル海へ流れ込んで半世紀の歳月が過ぎ、湖の面積は減り、過去に水没した漁村は陸地の真っ只中に姿を現した。塩分が高くなり、水が干上がってしまったところに生じた「塩田」から塩の粉が風に飛ばされ、住民の健康を脅かしている。乳幼児の死亡率と咽喉ガンの発生率が最も高い国がウズベキスタンであるという世界保健機構(WHO)の報告はこのような環境変化と無関係ではない。

日本の瀬戸内海に見られる変化過程で環境破壊の主犯は文明だった。1950年から60年代にかけての無差別な経済成長論が日本列島を支配し、瀬戸内海は死海へと変わった。このような問題を直視した当局が瀬戸内海の公害産業を優先的に取り除き、今はきれいな昔の姿を取り戻している。その公害事業はほとんどが、韓国の馬山や麗川などの公団や、中国の海岸工業地帯や東南アジアへ移転された。日本はそれらの面でいち早く手を引いたのである。

韓国の公害産業も徐々に海外へ移りつつあるように見える。少なくない工場が中国へ移転し、いまや「西海岸開発」という名目で黄海沿岸に移転している。過去数十年間、東アジアで起こった工場移転の傾向を見ると、黄海周辺に集まっていることがわかる。北朝鮮の開放時計が今は平壤から距離の上で最も遠い日本海へ動いているが、その実験が安定したものであるという見通しが立てば、平壤に近い南浦などの黄海沿岸に移転される公算が大きい。

21世紀、黄海の運命が非常に気がかりだ。東アジアの経済発展のスピードがピンク色を帯びれば帯びるほど黄海の運命はどす黒い暗雲がたれ込めている。公害事業により注がれる排水が予想され、この地域の生活条件が良くなって、高い「文明水準」となり、生活排水も爆発的に増える。

すでに中国大陸で黄海と揚子江から黄海に流れ込む生活下水は深刻な汚染の様相を呈している。13億の人口がみな水洗式トイレを使う時代を想像してみよう。最も少なく見積もっても、1人当たり1日に1リットルのウンチを7リットルの水を使って流している場合、黄海にとめどなく流れるウンチ水の量はいかばかりであろうか。朝鮮半島でも南北を通じて同じ現象が起こり、突き詰めると21世紀の黄海が「ウンチの海」の生態災難地域になるのは火を見るより明らかである。

ゴルバチョフ元大統領が就任間もなく最も深刻なソ連の問題として認識したのがアラル海の死海化であり、最初に発動した大統領布告令がアラル海生態災難地域に係るものだった。黄海に死海化の兆しが生じれば、朝鮮半島は偏西風により吹き付けられる塩気を含んだ風により、人が住めない地域となる。黄海の面積が減ることが予想され、水蒸気の増発量が縮小するであろう。これはこの一体の降水量を減らすこととなり、朝鮮半島と近隣地域は砂漠化の道を歩みうる。これは仮想ではない。公害時計に従えば進みうるシナリオである。

始華湖<sup>3</sup>ひとつが発生させる問題を考えてみると、この先、黄海の生態災難現象はこの地域に住む人の種の絶滅にも繋がりがうる可能性が見える。始華湖は災いの始まりを示す信号である。この信号の意味をきちんと把握し、備えなければならない。民族生存という次元を遙かに超えた問題である。

---

<sup>3</sup> 韓国の京畿道にあり、1994年に始華工業団地への工場呼び住宅用水を供給する目的で造られた人口湖。世界最大規模の湖力発電タービンの設置が行われ2010年完成予定。

私たちは中国人とこのような問題について真剣に論議し、21世紀の黄海を清浄海域として維持する方法を準備しなければならない。中国内部で起こっている海の埋め立てから中断しなければならない。この問題については私たちがまず声を上げ、国際機構を通じた強力な圧力を中国の側にかける計算を緻密にしなければならない。黄海を救うためにはグリーンラウンドの戦略も必要である。黄海の変化の致命傷を私たちが真っ先に直接的に受ける運命にあるのだから。

\*\*\*\*\*

付録

ウンチ博士全京秀教授との対話

シンスヒ 成均館大学校紀要編集委員 1998年入学

写真の典拠：2000年夏号 通巻68号 成均館大学校紀要

「ウンチが資源だって？ウンチは資源だ！」

灰を捨てたものは鞭打ち30回、ウンチを捨てたものは鞭打ち50回

朝鮮時代の古史を紐解くと、けちん坊はご飯は外で食べてもウンチとおしっこをするのは家だったそうだが、19-20世紀の初めに済州島の農民は農民戦争をしている途中で便意をもよおすとブタに餌としてやるために家に走って帰ったと伝えられている。また、韓国では「灰を捨てたものは鞭打ち30回、ウンチを捨てたものは鞭打ち50回」と書かれた碑石がたまに発見されたりする。鞭で50回打たれると、半殺しの目に遭うというのに、ウンチと灰はそれほど大切な肥やしの資源であるがために、捨ててはならないものであった。時として、ウンチが木から落ちて動けない患者や不治の病にかかった患者に最後に使われる薬となったりしたという。しかし、レバー一つで流れてくれる水洗式便器がほぼ普及した中で、このようにウンチが財産となり、薬となったという話は、人々に言葉そのままにおもしろい昔話に過ぎない。しかし、全京秀教授は「ウンチは資源だ」という本まで出して、現代にも依然としてその有用性を説いている。

ウンチの資源化は社会システム全体の問題

全京秀教授がウンチについて特別に愛着を持つようになったのは、全教授の母方の実家が済州島であることが強く影響している。トイレ、イコール、ブタ小屋である済州島の独特な風俗に幼い頃から接してきたため、自然と人のウンチがブタの餌となり、ブタのウンチは植物の養分となり、その植物は穀物を作り人のご飯となるという生態系の循環を見て育ったのである。

「1974年、韓国がセマウル運動<sup>4</sup>まっさかりの頃、国連開発機構(UNDP)からセマウル運動を援助す

<sup>4</sup> 1970年に当時の朴大統領が提唱して始まった韓国の地域開発運動。

るにあたり、心血を注いだことの一つが山林緑化だった。山林緑化がうまくいけば、水を貯え、農業用水や工業用水を使うことができる。しかしながら、人々が燃料として使うためにしばしば木を切り払ってしまった。だから代替燃料を作るために当時、タイのバイオガスプロジェクトからアイデアを得て、京畿道龍仁市にバイオガス(家庭用メタンガス)プラントを建てた。そのとき、私は大学院の学生だったが、学部生と実習に行った。私はウンチで何かすると言えば飛んでいったものです。しかしながら、ガスを起こすために、発酵槽に糞尿を入れる作業が煩わしいのに加え、臭いもひどく、またパイプラインの接続部分とコックがよく壊れた。さらに、韓国は自然状態の常温がタイより低く、発酵がうまくいかず結局失敗した。その後、1984年にユネスコから研究費をもらい、論文を書くことにして、済州島の松堂里にある松堂牧場に行きました。済州島は牛糞と馬糞が豊富であり、朝鮮半島本土より比較的湿度が高かったんです。」

幸い、龍仁市プラントの失敗後、農業振興庁に技術開発チームができ、技術的に非常に発展を遂げ、おかげで過去に着手した大型施設と一緒に、普通の一般家庭で使える小型乾式施設も開発された。これは積み肥、山野草、藁などの有機物を発酵タンクに入れ、常温25度、PH7で発生するメタンガスにより燃料が供給され、また残った原料は堆肥として作ってくれる施設であった。お金をかけず手に入れられる糞尿が強力な火の手を上げるのには多くの住民が不思議がった。煤を出さず、すっかり燃焼し、大金を掛けずに簡単に手に入れられる生物ガスは、当然のことながら主婦から大歓迎された。(済州島式の台所はオンドルと一緒に使われる朝鮮半島本土のかまどシステムとは異なり、かまどが別になっており、暖房は練炭で、炊事は雑草と薪で行っていたが、主婦が台所に入れば煤のせいで顔が煤だらけになって出てくることも日常茶飯事だった)。

しかしながら、また問題が持ち上がった。問題の原因は全体エネルギー管理システムが完備されていないことと、糞尿に対する人々の認識だった。燃料は長期的な改革により適正量が供給されなければならないが、政府側から無条件で燃料を安い価格で大量に供給した結果、あえて生物ガスを使わなくてもよいと考えたのである。また、住民の間では「ウンチの炎を灯してご飯を炊いて食べる」という言葉がまことしやかにささやかれた。ウンチとご飯に対する対照的なイメージによって、住民が混乱に陥ったのである。肥溜めと台所が遠く離れていて、パイプで繋がっているのを見て、ウンチを直接燃やしているわけではないという事実が明らかになってからも、住民は「それでもどうしても祖先が食べる法事のご飯としてお供えできない」として、簡単には気持ちを変えられなかった。そのような、人々の無理解は都市においても同様であった。

「以前はマンションに暮らしていましたが、町内会の会合が開かれる度に、私がウンチの話をしたんですよ。この多くの人ができるウンチをやみくもに捨て続ければ、環境がどれ程破壊されるだろうか。一人一日に平均して1リットル程度のウンチをするのが普通だとすれば、4名を基準にして一つの家族が一日にするウンチを比較してみると、4.5リットルにはゆうになる。それならば、犬二匹、ブター匹の朝ご飯の量にはなる。それだけか。アパートにバイオガスプラントを作れば、自分のウンチが他人の家のガスとなり、ウンチが我が家のガスとなるので、その燃料でご飯も炊いたりしていると、自然と互いに対する感謝も感じられ、隣人との関係も良くなるのではないか。しかしながら、他の人は私を見て皆がおかしいというのだ。人は単純に汚い、アパートの価格が下がるということしか考えないのだ。

今、全教授は江南区の細谷洞に位置した南向きの静かな町に住んでいる。どこでも見られる大きな



ディスカウントスーパーではない小さなマーケットと平凡な洋風な家、そしてフラワーショップがある町。ここでも全教授は当然ながらウンチを処理する方法について悩んだ。家族を説得し、庭に家族それぞれの穴を掘った。しかしながら、全教授がしようとしてすべてうまくいくわけではなかった。垣根が低く庭でお尻を放り出してウンチをすることができなかったのだ。個人がどれ程良いことをしようとしても、結局のところ、社会システム全体が支えてやらなければ、大変なことである。

## インドのチプロ運動とバイオガス

全教授は環境運動、農村開発運動が総合的に起こっているインドのチプロ運動に非常に関心を抱いている。「インドの農業経済学者は自分たちの国が貧しい理由を、イギリスの産業革命に求めている。イギリスが産業革命により世界の富国となり、コインの表裏のように、インドを初めとしたイギリスの諸植民地収奪過程を見ると、インドがなぜ未だに貧しいのかわかる。考古学的に見ると、モヘンジョ・ダロやタージマハールなど、素晴らしい文化遺産は、植民地支配を受ける以前に、インドの余剰生産物が後ろ盾となり、経済的な能力が十分であったことがわかるが、このようなライフサポートシステム(life support system)が植民地期間の間に崩れてしまったんです。産業革命の間、イギリスはインドで綿を生産させ、綿花を持って行ってしまったんですよ。インドの農地は、それまで食料生産をして来たがその土地に綿を栽培したので、雑穀体系が崩れ、綿を輸送するために鉄道と港を敷設し、既存の灌漑施設が崩れてしまったんです。イギリスを富める国にするためのパイプラインが形成されている間に、インドは少しずつ貧しくなっていました。結局、インドでは、「私たちがこのようになった理由は、熱帯雨林を切り倒してしまったから」という結論を出し、「木を切るのをやめよう」という運動をしました。それがチプロ運動です。(チプロとは「木に抱きつく」という意味)。それから、木の代替となる燃料を人や牛の排泄物、木、家庭用有機物の類を集めてバイオガスパワープラントを作ったんです。(インドの女性・環境運動は他の国に比べて進んでいるほうである。ヴァンダナ・シヴァ(Vandana Shiva)は「生きる歓び—イデオロギーとしての近代科学批判<sup>5)</sup>」という著書の中で、「300年前、ラージャスターンのビシノイ集落の300人以上の人たちが、アムリタ・デヴィという女性の指導で、彼らの聖なる木、ケジュリを保護すべくこれに抱きついて命を賭けた」と説明している。その後、反アルコール運動<sup>6)</sup>を通じて、作られた組織をチプロが引き継いで、運動はより活性化・組織化して行き、いくつかの伐採契約がキャンセルされたりもした。)」

## 国ごとに、特異な便所文化

「過去にはウンチを生物学的にすべて処理した。揚子江以北と朝鮮半島ではブタが処理し、揚子江南部と東南アジア一帯(マレーシア、インドネシア)、ベトナムなどの地では魚を利用しました。今も山間部の村であるバリに行くと、日が沈む頃、村の人々が全員集まって、水が流れるところに集まって、ウンチ

<sup>5)</sup> 原題: Staying Alive: Women, Ecology and Survival in India, 熊崎実訳・築地書館 1994年

<sup>6)</sup> 樹木を伐採して現金を得、それをすぐにアルコールに替えてしまう男達の酒浸りを止めさせるための運動

をしたんだ。便所が重要であるコミュニケーションの場所となったんです。インドネシアのジャカルタでは池の周囲に家がぐるっと囲むように建っており、人々はウンチやおしっこを池にそのままして、その人糞を魚が食べます。池の水は一年に2度ほど抜きます。ベトナムではメコン川が家を流れているのだが、その上にゴチャゴチャと編んだ竹の版を置けば、便所だ。ウンチをするところが養魚場だが、人のウンチを魚が食べ、その魚を人が食べるようになるんだ。1976年から北ヨーロッパがベトナムに援助をしてきたお礼にベトナムの人々が北ヨーロッパの人々に自分たちの魚、エビを食事に出して、全部を平らげた後で、この養魚場のことを知ったのです。結局、おいしく食べたものをその後全部吐き出し、もう二度と送ってこないように重ね重ね言い含めて帰ったんです。西洋の衛生観念では到底許されない状況だったんです。」

ウンチの有用性を述べる全教授の話には終わりがなかった。「孟子は鶏豚狗彘之畜」と言った。鶏、豚、犬をまとめて家畜を意味するのだが、後ろに置いた雌豚を意味する彘がまた出てくるのである。つまり、雌豚が長生きして堆肥を生産してこそ農業がうまくいくというのである。そのように済州島では豚を利用した。玉篇レベルである崔世珍の「訓蒙字会」を見ると、厠を表す溷という字があるのだが、「さんずい」に「くにごまえ」に豚が一匹いる形でしょう。人が豚小屋でウンチをするという意味です。最近、中国では「猪圈」と言います。豚のオリという意味です。人類学的に見ると、トイレ一つで文化が異なるものです。人が生まれてから死ぬまでウンチをするのに当然ではないでしょうか。

#### 失われた韓国の厠文化

韓国にはトイレを指す言葉がたくさんある。心配事や雑念を心の気がかりを流すという解憂所、体を清めるという意味の浄房、陰部や肛門を洗う空間という意味の北水間、そして便所と厠。その中でも、よく使われる便所と厠には相当な違いがある。便所は言葉そのままに大小便をする所を意味する。日本は明治維新以降に西洋を追いかけ、衛生を強調しつつ、便所という言葉を使い、韓国もまた、それを真似て使った。しかし、本来、トイレを指す韓国語の言葉は厠であった。厠というものは、人が来てウンチをして、ブタが住み、ブタにあげる台所の汚水が流れて来て、またそれによって農業をする肥やしを作り出されるという、非常に複合的な空間である。人々がウンチ博士の言葉にうなずきながらも「ウンチは汚いもの」という考えを容易に振り払えないのは、西洋の営農方法と便所文化に浸り、従来の厠文化を忘れて暮らしていたからであるかもしれない。

人々のウンチに対する認識を、全教授はこのように述べている。「私たちは1人1人がウンチの生産者であることを完全に忘れています。ウンチをゴミとして見る観点は、自分たちの体を「ゴミを作り出す消費体」と見ているのであって、ウンチを資源として見る観点は自分たちの体を「資源を作り出す生産体」と考えることになるのです。体の中に入ってくれば、それだけ出て行くのは普通のことであり、本来、私たちの体は生態系の中のリサイクルの一部をなすことにより、生態系の全体を維持させるのにおいて、大きく貢献しようとしているのです。」

私たちはよく自分の周りだけを一生懸命に線引きして、その区域だけはきれいに見栄えよくしなければならぬと考えており、自分の区域以外のところは、簡単に壊したり、少し汚いと思えば、自分の区域

外のところへ押しやってしまう。リサイクル？カンや紙、プラスチック以外に、ウンチもまたリサイクルされなければならないと考えてみた人が何人になるだろうか。おしりに少しでも残っているかと思って、何度もお尻を拭き、自分の体が出したウンチは、もう自分とは関係のないゴミであるかのように、一刻も早く、水に流してしまう態度をそろそろ反省して改める時が来たのだと感じた。ご飯も残さず食べ、ゴミの分別収集もきちんとする程であれば、環境を大切にす模範市民だと普段から思ってきたが、ウンチ博士の話聞いてみると、環境保護、リサイクルの最も近い部分を皆が見過ごしているという考えが絶えずした。

#### ウンチの問題はすなわち水の問題

全教授のウンチ哲学は、今水問題にまで範囲を拡げている。全博士は水が足りない原因の一つとして、水洗式便器を上げている『ウンチを一回して流す水は、節水型では7リットルだが、普通は13リットルになるので、一日に一回ずつ使うだけでも、4人家族の場合50リットルにもなります。それも一日に一回するだけでなく、一回で流れないことも多く何回も流したりします。』

それを聞いて初めて、冒頭の挨拶で「ウンチをする時に水は一回流しますか、それとも二回ですか」とわざわざ聞かれたことを思い出した。だからといって便器を塞いで、ウンチができないようにするわけにもいかないし、新都市を一つずつ造る毎に、「ああ、どこから水を引いてくるんだろう。」と心配になります。地下水を度々使うと、地下水の層が無くなってしまい自然と地盤が沈下するなどの様々な問題が生じます。

濟州島のような場合は、飲み水として、湧き水を使う。地面から湧き出る水のことです。しかし、最近では濟州島にも温泉や、何やかんやと言って、水を汲んでは使うので、淡水と海水の均衡が崩れ、海水が陸地のほうへ押し寄せてきている。このままいけば、濟州島は最終的には人が住めない島になるだろう。つまり、こちらが立てばあちらが立たずで(one problem one solution)、結局はシステム全体がダウンするのだ。実際のところ、環境問題の中でも水の問題が最も大事だ。サバンナ(半砂漠地帯)気候である東アフリカのマサイは、乾季には何ヶ月間も雨が降らないので、歯磨きの水や、洗顔の水はもつてのほかだ。毎日、明け方に太陽が昇る前に、男たちは牛を追い回しに行き、妻と子どもは入れ物を持って出かける。マサイは朝夕と昼間の温度差が大きいんですよ。彼らは草の葉の一つ一つについている露をかき集めて、飲み水を手に入れるんです。マサイの家族が一日に使う水は5リットルにもなりません。私たちが一回ウンチをして流す水は13リットルも使うのにですよ。」

この間、建設の白紙化が公表された東江ダム<sup>7</sup>の建設を万が一、強行していたと仮定してみよう。ダムを通じて、3億6千万トンを得るために一兆ウォンが必要なのであれば、全国の家便器に節水施設を取り付けるのに800億ウォンしかかからないのである。単純に数字だけで比較してみても、後の方がはるかに節約になることは明らかであり、その後もずっと続く水問題にも考慮をするなら、その価値は比較することができない。

全教授は、最近、ダムの生態系に大いに興味を持っている。「ダムを作れば生態系が「川の生態系」から「湖の生態系」へ変わるのだが、人々はそれを考えずにダムを作るんです。川の生態系では流速が

<sup>7</sup> 韓国江原道に建設が予定されていたダム。

あるが、湖の生態系は貯水となります。鮎のように、流速がある所で生きる生物は水が流れないところでは生きられません。八堂ダムの魚も外国種中心の生態系へと変わってしまいました。そのように生態系一つを転換させるのがダムであるが、そこにはただ利益だけを追い求める多国籍企業と関係があります。ガスで電気を生産するインドや渓谷が多い日本のように、小水力(マイクロ水力)発電をするならば、おそらく韓国電力とその後ろにつく多国籍企業が全部倒れてしまうでしょう。保存対開発という、先鋭な価値の対立のために、生態系保全が難しいのです。私は保存ができなければ、開発もできないと思っているが、この問題は資本主義とワールドシステムという問題、すなわち、多国籍企業が複雑に互いに関わり合っているのです。」

動植物が段々といなくなる自然環境では、人間も生きられないということを理解し、生態循環がうまくいくことが最善だということも知っているのに、自分たちが作った社会構造のために、私たちは自然の中へ戻れずにいる。実際のところ、これがどうにかして解決したとしても、私たちは便利さから抜け出し、投げ捨てる勇気さえも持ち合わせていないのかもしれない。

最後の最後に、「ウンチは資源だってば！」

ウンチを新しい視点で見つめようという私たちの意図通りに、ウンチ博士はウンチから多くの意味と哲学を探し出していた。全教授とのインタビューをしながら、私たちは、本当に沢山笑った。しかしながら、全教授の真面目な説明を聞いていると、毎度毎度、その笑いがしぼんで行ってしまった。ウンチについての全教授の考えは哲学という単語を使っても遜色ないくらい論理的で合理的なものだった。しかし、ウンチが資源であるという全教授の主張がどんなに正しい話であったとしても、現代文明の利器がすでに骨の髄まで染み込んでいる私たちにとって、全教授の主張が簡単に反映されるようには思えない。全教授の言葉のように、一人、二人がしようとしてできることでもなく、また、すでに私たちの社会のシステムは自然を後ろに追いやったまま、遠いところまで歩いてきたのである。しかしながら、私たちが歩いてきた道を振り返ってみると、反省を促す全教授の作業は生涯続くことだろう。しばらくすると出版される「ウンチが資源である」に続く全教授の本である「ウンチも資源だってば！」でも私たちはそのような努力を確認することができるだろう。